

Th. リップス感情移入美学の現象学的再考

峯尾幸之介

1. はじめに

現代において「共感」や「感情移入」という言葉は、芸術を評価する上での常套句となっているが、美学や芸術論の文脈のなかで、「共感」(英: sympathy, 独: Sympathie)や「感情移入」(英: empathy, 独: Einfühlung)という語がはじめて用いられたのは、ヘルダーやノヴァーリスにおいてである⁽¹⁾。その後、心理学的美学において「感情移入」を原理とした美学が体系化されることとなり、その代表的な地位にあったのがTh. リップス(Theodor Lipps, 1851-1914)の感情移入美学である。この辺の歴史的な事情について詳述することはできないが、なんとしても注意すべきは、この「感情移入」という語は、たんに、芸術家や作品の登場人物への感情移入のみを表わしているのではない、ということである。ごく平易な表現をすれば、相手の立場にたってその気持ちを思い描く、ということではないのである。今日、この語が言及されるのは、多くの場合、フッサール(Edmund Husserl, 1859-1938)の現象学における間主観性の問題においてである。そこでは、他我経験の問題として、リップスが、J. S. ミルらの「類推説」に対して、「本能説」を唱えたことが一定の仕方で評価されているものの、この本能説もまた「無知の避難所」としてフッサールによって批判されている⁽²⁾。

リップスの心理学は、フッサールによって名指しで「心理学主義」と批判されている⁽³⁾ように、基本的に、現象学とは対立関係にある。同様に、彼の心理学的美学は、リップス、フッサール双方の弟子であるガイガー(Moritz Geiger, 1880-1938)の現象学的美学と、原則的に相容れない立場にある。そのため、本稿のタイトルである「Th. リップス感情移入美学の現象学的再考」とは、ガイガーのような「反心理学主義」を標榜する初期現象学派(いわゆるミュンヘン - ゲッティンゲン学派)にとっては異様な響きを

与えることだろう。しかしながら、後に触れるように、初期現象学派の反心理学主義、およびそれと関連する客観主義的価値論は、必ずしも成功していると言えるものではない。そこで、本稿では、リップスが心理学主義として批判される所以を指摘し、さらに彼の心理学的美学とガイガーらの現象学的美学の対立点を際立たせつつ、リップスの感情移入美学が、ある場合には「現象学的」として救い出される余地があることを述べてみたいと思う。

2. 美的感情移入とはなにか

ここでははじめに、リップスの美的感情移入論の概要を紹介しなければならない。リップスは、美的経験を二つの原理から説明する。第一のものが「一般的美的形式原理」(allgemeine ästhetische Formprinzipien)であり、これを基盤として、「美的感情移入」(ästhetische Einfühlung)が成立する。彼は、「自己価値感情」(Selbstwertgefühl)という一種の快感情を美的価値の源泉とみなしているが、「統覚」(Apperzeption)と統覚される対象との友好的(ないし敵対的)関係を、この快(不快)感情が発生する条件とみなしている⁽⁴⁾。ごく簡単に解説すると、次のようになる。リップスによると、心にはその本性として、対象の多様なものを統一的に把握しようとする傾向と、統一が損なわれないかぎりでも多様なものを独立的に把握しようとする傾向が内在している⁽⁵⁾。前者の傾向は「統一の法則」、後者は「多様性中の統一の法則」と呼ばれる。例えば、規則的に構成された幾何学的対象は、これらの統覚の法則に適合するため、心に快感情を与えるとされる。しかしこれだけでは、美的経験は成立しない。この統覚理論にもとづいた一般的美的形式原理とは、いわば「感官的(sinnlich)形式の原理」であり、これによってわれわれが経験するものは、たんなる「対象的快感情」にすぎず、これが「美的」(ästhetisch)なものたるには、感情移入による対象の、ある種の人間化が不可欠となる⁽⁶⁾。

リップスの美的感情移入とは、端的に、自己価値感情の客観化、と言い表すことができる。心の統覚の働きにとって友好的な関係にある対象、つまり、多様性を内包し、

かつ統一的な捕捉が可能である対象は、統覚の遂行を「強制ないし要求」するのではなく、それを「自己発動」(Selbstbetätigung) させる⁽⁷⁾。このとき、対象は「行為の力、豊かさないし広さ、内的な自由についての快」⁽⁸⁾を喚起し、この快が客観化されることによって、対象は美的価値をになうようになる。ここから、美的対象とは、自我の「生」および「生の可能性」を肯定するような対象として特徴づけられる。このような前提のもと、リップスは、美とその存立条件としての感情移入を次のように説明している。

われわれの積極的評価の対象は、あらゆる生 (Leben) とあらゆる生の可能性 (Lebensmöglichkeit) である。正確には、この生が現実的なもの、すなわち積極的な生であり、生ないし生の諸可能性の否定、窮乏、衰弱、ないしそれらの兆候ではないかぎりにおいて、そうなのである。そして同様に付け加えることができるのは、そのようなあらゆる生の否定は、われわれにとって無価値であるということである。／そしてそれをもって、そこで同時に、すべての美しいものの意味が特徴づけられている。美しさの享受はすべて、客観の内に存する生動性 (Lebendigkeit) と生の可能性の印象である。そしてすべての醜さは、その究極的な本質に従って、生の否定 (Lebensnegation)、生の窮乏、阻害、萎縮、破壊、死である⁽⁹⁾。〔以下、下線はすべて筆者によるもの〕

われわれは積極的感情移入を、共感的感情移入としても特徴づける。共感的感情移入の対象は美しく、同様に、消極的感情移入の対象は醜い。そして、そのような消極的感情移入なしにはいかなる醜さも存在せず、積極的感情移入なしにはいかなる美しさも存在しない。美しさの感情は、私が官能的な客観の内に体験する積極的な生の発動であり、それは自己肯定ないし生の肯定の客観化された感情である。醜さの感情は、私自身の否定の客観化された感情、あるいは体験され、客観化された生の否定の感情である⁽¹⁰⁾。

3. 初期現象学派による批判とその脆弱性

本稿冒頭で言及したフッサールによるリップス批判は、間主観性の問題という文脈のなかで展開されたものであるが、初期現象学派による批判は、意味や価値という「理想的」(ideal)なものの客観性を根拠づけるという課題のもとでなされている。ここでは、リップスとガイガーを比較することで、双方の立場の対立点を際立たせてみる。『美学』第1巻(1903)冒頭において、リップスの心理学的 - 主観主義的立場が明確に提示されている。

ある客観が「美しい」とされるのは、それがあある独特の感情、すなわちわれわれが「美しさの感情」(Schönheitsgefühl)と常々特徴づけるものを、私のうちに呼びさまし、あるいは呼びさますのにふさわしいためである。いかなる場合においても、「美しさ」とは、私のうちにある特定の効果(Wirkung)をひき起こす客観の能力のための名称である⁽¹¹⁾。

このように、リップスは美という事象の根拠を、対象そのものではなく、対象が主観にもたらす「効果」(Wirkung)のうちに見出している。それに対し、ガイガーは美的価値が主観から自立して存在していることを強調する。彼は、論文「芸術的体験におけるディレクタンティズムについて」(1928)において、リップス美学のような「効果美学」という立場に対して、次のようにみずからの立場を「価値美学」と規定する。

そのような効果美学(Wirkungsästhetik)は、価値美学(Wertästhetik)に対立している。価値美学にとって、芸術的プロセスの中心は受容者(das Aufnehmende)のうちではなく、芸術作品そのものうちにある。芸術作品は、みずからのうちにおいて価値があり、価値諸契機——釣り合い、自然の再現などという価値——の担い手である。これらの価値を、だれかが受容しているか否かは、まったくどうでもよいことである⁽¹²⁾。

ガイガーの美的価値論は、同じく初期現象学派に属するシェーラー (Max Scheler, 1874-1928) が『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』(1913)において展開した価値論を土台としている⁽¹³⁾が、いずれも価値認識においてはその認識者が必要であることを指摘しつつも、その存在については、認識者とその認識の働きから独立していると主張する。ここでは、初期現象学派の客観主義的価値論を詳細に検討することはできないが、簡潔に述べるならば、彼らは価値の客観性を保証する上で、次のような戦略をとっている。すなわち、ときにわれわれが遭遇する価値の相対性とは、価値そのものの相対性ではなく、価値認識の相対性である、として、主観の側に責を負わせるのである⁽¹⁴⁾。

ガイガーは上で述べているように、価値美学の必要性を指摘しているが、にもかかわらず、結局は彼の研究の多くが美的経験における効果の分析に終始してしまっている。ガイガーが美的効果を「表層効果」(Oberflächenwirkung)と「深層効果」(Tiefenwirkung)とに区分し、後者を美的に意義あるものと位置づけている⁽¹⁵⁾ことはよく知られているが、ここで彼はみずからの価値客観主義という立場を一貫させるのに失敗している。例えば、木幡順三は、そこに見出される矛盾を次のように鋭く追及している。

ガイガーのごとく価値そのものの体験外在という前提に立てば、美的価値の成立事情の考察は美的体験の考察とは別個になされてしかるべく、美の深さはそうした価値へのひたすらなる帰依にほかならない。しかしそのガイガーにしても〔…〕享受の品質として、前者に依存しない独特の評価をうけるべき「深さなるもの」を承認しないわけにはいかなかった。だがこれはある意味ではすこぶる曖昧な態度といわねばならない。なぜならこのものは美的享受体験の^{原文ママ}Wertung〔Wertung(評価)——筆者〕の一方の根拠となりながらも、美的価値の構成にはあずからないからである⁽¹⁶⁾。

ガイガーら初期現象学派の美学者たちは、美的価値をある種の快感情を喚起する「効

果」へと還元するような心理学的美学への対抗として出発した以上、主観性における美的価値の「構成」という発想をとらない。初期現象学派がフッサールから受け取ったもの、すなわち彼らなりの「現象学」とは、本質の直観的記述として要約されうるが、それにもかかわらず、彼らは直観的所与を超越した価値の存在を前提としてしまっている。対して、リップスの場合、自我の外部に超越的価値の存在を前提とすることはないのである。

4. 美的感情移入論再考

ここではまず、Einfühlung の訳語について、いくらかコメントしておきたい。この語は、間主観性の問題という文脈において用いられるときには、「自己移入」と訳されることもある⁽¹⁷⁾。しかしながら、美学において Einfühlung を取り扱う際には、「感情移入」ないし「感入」が適切であるように思われる。石田三千雄が、「自己移入」や「自己投入」では Einfühlung の Fühlung 「感じること」という部分のニュアンスが消えてしまうであろう⁽¹⁸⁾と指摘しているように、リップスの Einfühlung とは、自我がみずからのうちに感じるような気分や運動性を、生き生きとした仕方での外的事物や他者のうちに感じるという経験を意味しているのである。リップスは、ヒュームの『人性論』(1739-40)を独訳した⁽¹⁹⁾ことでも知られているように、経験論的術語を駆使し、美的経験が時間的な蓄積によって、より豊かで厚みあるものに発展していく過程を描き出している。この点を詳しく確認するために、ここでは彼の著作『美学』第1巻の第2編「人間と自然事物」を参照してみたい。

この「人間と自然事物」では、美的感情移入全般、他者の身体への感情移入、自然事物への感情移入が分析されている。リップス感情移入論の優れた点は、従来の類推説が他我経験を知的かつ間接的なものとしたのに対して、むしろわれわれは直接的に、感性的次元において他我を経験するという本能説を提示したことにある。さしあたり、リップスが第3章で挙げている「曲芸師」(Akrobat)の例を引いてみよう。

第一に、——私がかの曲芸師の芸当の観照のもとで体験するのは、彼の運動のうちで告知されている自由、自信などである。私は、みずからが自由であり、自信に満ちているなどと感じる。もし曲芸師が危なげになるならば、私は危なっかしさ、そして場合によっては不安や絶望を感じる。曲芸師の運動を観照しつつそれに没頭していればしているほど、私はこれらすべてのことをますます確かに感じる。／そして第二に、——私は同時に、これらすべてのことを曲芸師のうちに、そしてただ彼のうちにおいてのみ感じる。私は、並存して、一方では彼が感じるという意識を、そして他方ではみずからの感情をもつというのではなく、感情はただ一遍にそこにあるのである⁽²⁰⁾。

この記述から理解されるように、リップスは本能的な感情移入という原理を導入することによって、われわれが他者の運動を知覚する際に直接的に感受することのできる躍動感やスリルをとらえている。われわれはそれらを、類推という知的で間接的な過程をつうじて経験するのではなく、直接に、生き生きとした仕方で経験するのである。

リップスは、感情移入という経験を説明する上で、一方では「本能」を、他方ではまた「経験」をその糸口としている。筆者の見解としては、このような説明原理の二重性は、リップスの心理学的方法の二重性に由来するものである。彼は『心理学原論』(第3版、1909)においてみずからの方法論的立場を明示している。それによると、心理学は、第一には「自我および自我内の出来事にかんする経験的科学」として、「他者」のではなく「私」の意識体験の「記述」を出発点としなければならない⁽²¹⁾。しかしながら、第二に、意識体験の基礎として実在的な心や心的過程を想定することによって、意識の流れを因果的に「説明」することが心理学の課題であると主張している⁽²²⁾。後者のような「説明心理学」という立場において、それ自体を現象として経験することはできないが、心の法則性を説明するために方法的に想定されるのが、リップスの言う本能なのである。そして、前者のような「記述心理学」の立場から、リップスは、現象学者たちが掲げていた記述という方法に依拠していたという点で、「現象学的」な姿勢を示しているのである⁽²³⁾。また、説明心理学の立場としても、そこで想定さ

れる実在的な心は、精神生理学において説明原理のひとつとなる「脳」のようなものとは区別され、あくまで直接の意識体験を説明するために仮定されるものにすぎない、ということ強調している⁽²⁴⁾ 点で、彼の方法論的な注意深さがうかがえるだろう。

さて、リップスは経験の蓄積が感情移入体験を発展させる過程を、いかなる仕方で描き出しているのか。リップスによると、「ある種の情動は、「本源的に」(ursprünglich)私のうちにあるのではなく、経験の経過においてようやく、発展する」⁽²⁵⁾。ここでは直接に言及してはいないが、次の文から明らかであるように、ここでいう「経験」とは、「連合」を指している。

原始的な情動を発展させた経験や、細分化された情動を徐々に発展させた、より豊かな経験に加えて、最後に、新たな意味における経験が参加する。すなわち、それは表出運動の理解という、上で退けられた経験論的理論の意味における経験である。かの理論といえども、まさに比較的な正しさをもっている。人間の言語的伝達や行為といえども、われわれがその内面を知るのに役立つのである。そしてわれわれが行為や言語的伝達に付随する表出運動を観察することによって、これらの告知するものが、かの表出運動と結びつけられ、そして経験のさらなる経過において、きわめて緊密な統一へと織り合わせられうる。そこから、絶えず発達する表出運動の意義の豊富化と洗練が生じざるをえないのである⁽²⁶⁾。

われわれの感情移入は、ときに「誤る」。沈黙し、いかにも「つまらない」といった表情をしている友人が、よく話してみると、とても楽しんでいて、という場面にしばしば出会う。このような経験をつうじて、われわれはごくわずかな表情のちがいを察知し、それぞれちがった仕方で、それも直感的に、感情移入するようになるのである。曲芸師の事例において、リップスは表出「運動」への感情移入を描写していたが、このような経験的な感情移入体験の発展という原理を導入することによって、「静止」した対象への感情移入の可能性を示している。彼は、いかなる運動も呈することのない「耳」への感情移入を次のように説明している。

例えば、人間の耳は、わたしにとってそれ自体としては、生気のないものである。耳は、いかなる運動能力もないのみならず、私はその観照から、ある独特の、とりわけそこに躍動している生の感情を獲得することもない。とはいえ、耳は、身体に、そしてとくに顔の全体とともに属している。そして仮に、私がある特定の形と大きさをした耳が、一般にその他の点で、とりわけ目と口の作りによって私にとって喜ばしい顔と結びついていると認めたとすれば、この特定の大きさと形をした耳も、いくらかそうした喜ばしさを語るのである。同様に、もし私が、その他の点では喜ばしくない性格をもつ顔においてそのような形と大きさをした顔に常々出会うならば、その耳はある喜ばしくない性格を獲得することになる、あるいは私にとって醜く思われるだろう。例えば、卑しい者の顔ないし悪人面が、突き立った耳をそなえているならば、この耳は、卑しい者ないし悪人の耳となる。それをもってそのような耳は、それ自身、美的に烙印を押されるのである⁽²⁷⁾。

このように、リップスは、感情移入が経験的連合によって発展していく過程に着目することによって、われわれと世界との生き生きとした関係をつかみ出そうと試みている。フッサールが感情移入という原理を他我経験の超越論的根拠づけという目的のもとで使用するとき、「ある種の不自然さが伴う」⁽²⁸⁾のとは反対に、リップスの感情移入論は、豊かな感情に彩られた世界経験を描き出しており、その点に、「事象そのものへ」という現象学的記述の精神が見出されるのである⁽²⁹⁾。ガイガーのような初期現象学者は反心理学主義を押し進め、価値認識の客観性を問題とする過程で、感情体験を美的経験から排除する傾向をもっているが、むしろリップスがしたように、そのような感情体験の流動に目を開くことによってこそ、われわれは本来の美的経験に接近しうるのではないだろうか。

5. おわりに

以上のように、リップスは、初期現象学派から心理学主義として批判的となっ

てはいるが、彼の美的感情移入論には、生き生きとした感情をつうじた世界経験に肉薄しようとする姿勢が見出され、そこには「現象学的」と評価されるべき余地がある。これは、彼が自我の外部に超越的価値を前提としないからこそ、可能であったことだろう。もし、実際の経験とは無関係に美的価値が存在していると前提すれば、そのつど変化する美的経験の多様性が看過され、統一的な規準によって画一化されてしまう危険性があるからである。そこで、われわれはリップスの心理学的美学を注意深く吟味し、そこから美的経験の現象学的研究として活かされるべきものを探っていかなければならない。

註

- (1) 竹内敏雄編『美学事典 増補版』弘文堂、1974年、71-72頁参照。
- (2) フッサール『間主観性の現象学——その方法』（浜渦辰二、山口一郎訳）筑摩書房、2012年、250頁。
- (3) Vgl. Edmund Husserl, *Logische Untersuchungen. Bd. 1: Prolegomena zur reinen Logik*, 4. Aufl. (unveränderter Abdruck der 2. umgearbeiteten Aufl.), Max Niemeyer, Halle a. d. S. 1928. なお、立松弘孝によると、リップスはこの『論理学研究』第1巻におけるフッサールの批判を受け入れ、後に「論理学のアプリオリな性格を主張するようになった」。フッサール『論理学研究』第1巻（立松弘孝訳）みすず書房、1968年、283-284頁、訳注12**。
- (4) Vgl. Theodor Lipps, *Ästhetik: Psychologie des Schönen und der Kunst. T. 1: Grundlegung der Ästhetik*, Leopold Voss, Hamburg und Leipzig 1903, S. 12.
- (5) Vgl. *ibid.*, S. 33.
- (6) Vgl. *ibid.*, S. 96-97.
- (7) *Ibid.*, S. 10.
- (8) *Ibid.*, S. 98.
- (9) *Ibid.*, S. 102.
- (10) *Ibid.*, S. 140.
- (11) *Ibid.*, S. 1.
- (12) Moritz Geiger, “Vom Dilettantismus im künstlerischen Erleben”, in: *Die Bedeutung der Kunst. Zugänge zu einer Materialen Wertästhetik*, Gesammelte, aus dem Nachlaß ergänzte Schriften zur Ästhetik, hrsg. von Klaus Berger und Wolfhart Henckmann, Wilhelm Fink, München 1974, S.

167.

(13) 太田喬夫「美的享受と美的価値——M. ガイガーの現象学的美学」『美・芸術・真理——ドイツの美学者たち』（太田ほか編）昭和堂、1987年、192頁参照。

(14) 例えば、シェーラーは次のように述べている。「私たちの価値把握の明証性と客観的存在妥当性にとっては、〔…〕この種族の全員が洞察を所有しうるかどうか〔…〕は、全くどうでもよいことである。また、人間の歴史的生命的発展のいかなる段階においてそうした作用が出現したかということも原理的にどうでもよい。肝心なことは、それらが存在するところではいつでも、また存在するかぎり、それらとその対象は法則性に従い、そしてこの法則性は色彩幾何学や音響幾何学の命題と同様に帰納的経験には依存しないということである。」シェーラー『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』上巻（吉沢伝三郎訳、吉沢ほか編『シェーラー著作集』第1巻）白水社、1976年、185頁。

(15) Vgl. Moritz Geiger, "Oberflächen- und Tiefenwirkung der Kunst", in: *Die Bedeutung der Kunst*, S. 178-201.

(16) 木幡順三『美意識の現象学——美学論文集』慶応通信、1984年、105頁。

(17) 例えば、木田元ほか編『縮刷版 現象学事典』（弘文堂、2014年）において、Einfühlung は「自己移入」と訳されている。

(18) 石田三千雄「フッサール現象学における感情移入の問題」『人間社会文化研究』第8巻、徳島大学総合科学部、2001年、25-41頁。

(19) Vgl. David Hume, *Ein Traktat über die menschliche Natur*. Bd. 1-3 (*Philosophische Bibliothek*. Bd. 283), übersetzt und hrsg. von Theodor Lipps, Felix Meiner, Hamburg 1978.

(20) Lipps, *Ästhetik*, S. 134-135.

(21) Theodor Lipps, *Leitfaden der Psychologie*, 3., teilweise umgearbeitete Aufl., Wilhelm Engelmann, Leipzig 1909, S. 1.

(22) Vgl. *ibid.*, S. 43-47.

(23) そもそもリップスは、フッサールがそうする以前に、「現象学」という語を用いている。『縮刷版 現象学事典』602頁参照。しかしながら、リップスの記述心理学は「超越論的・現象学的」という意味において「現象学的」と性格づけることはできないだろう。筆者は、リップスが意識体験の内在的な「記述」を実践しているという意味において、彼の心理学が「現象学的」性格をもつとして評価する。超越論的現象学と現象学的心理学と相違および平行関係については、フッサール『ブリタニカ草稿——現象学の核心』（谷徹訳）筑摩書房、2004年参照。

(24) Vgl. Lipps, *Leitfaden der Psychologie*, S. 51-57.

(25) Lipps, *Ästhetik*, S. 137.

(26) *Ibid.*, S. 138.

(27) *Ibid.*, S. 151-152.

(28) 石田三千雄「フッサール現象学における感情移入の問題」37頁。

(29) 石田三千雄は、現象学的な観点から、リップスの感情移入論を積極的に評価している。「われわれはリップスの以上のような広い意味での「自己客観化」としての感情移入の叙述のうちに、対象を外部から記述するのではなく、いわば対象のうちに入って、対象に即してわれわれに現出している事象をあるがままに生き生きと記述しようとする試みを見ることができるであろう。そこではあらゆる対象、過程が感情を帯びてわれわれに現出する様子が記述されている。これは現象学的記述に通じるものをもっている。」石田三千雄「テオドール・リップスの感情移入論をめぐる問題」『人間社会文化研究』第6巻、徳島大学総合科学部、1999年、8頁。石田はこの論文で、シュミッツ（Herman Schmitz, 1928-）を引き合いに出し、リップスの感情移入が他者との「身体的コミュニケーション」として解釈されうるとしている。これとの対比において、本稿で筆者が強調したいのは、美的経験においてこそ、より一層、リップスの感情移入論が活かされうるということである。というのも、他者経験においては、なによりも他者の他性や無限性といった倫理的なものが問題となる一方で、美的経験はそのような善悪にかかわる問題を免れており、これを純粹に自己感情の経験として理解することが許されているからである。